

佐久市埋蔵文化財報告書 第94集

長 土 呂 遺 跡 群

# 聖 石 遺 跡

長野県佐久市長土呂  
聖石遺跡発掘調査報告書

2002. 3

大蔵不動産株式会社  
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財報告書 第94集

長 土 呂 遺 跡 群

# 聖 石 遺 跡

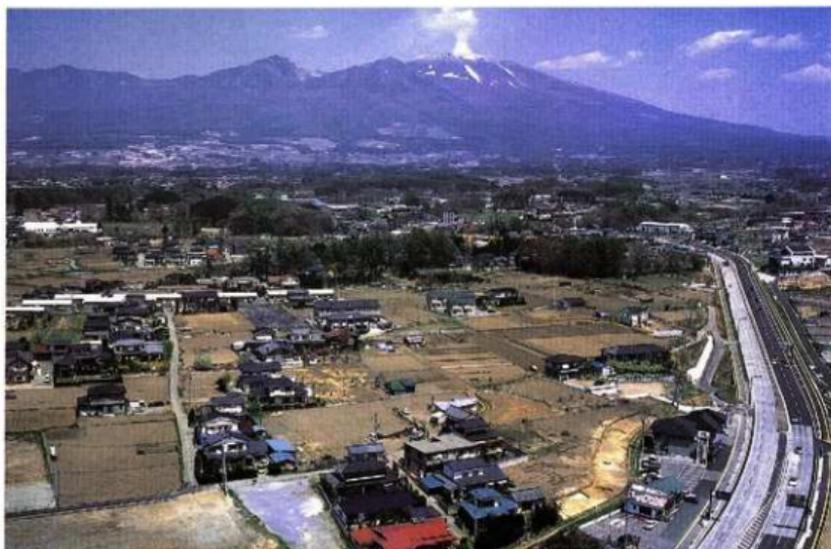
長野県佐久市長土呂  
聖石遺跡発掘調査報告書

2002.3

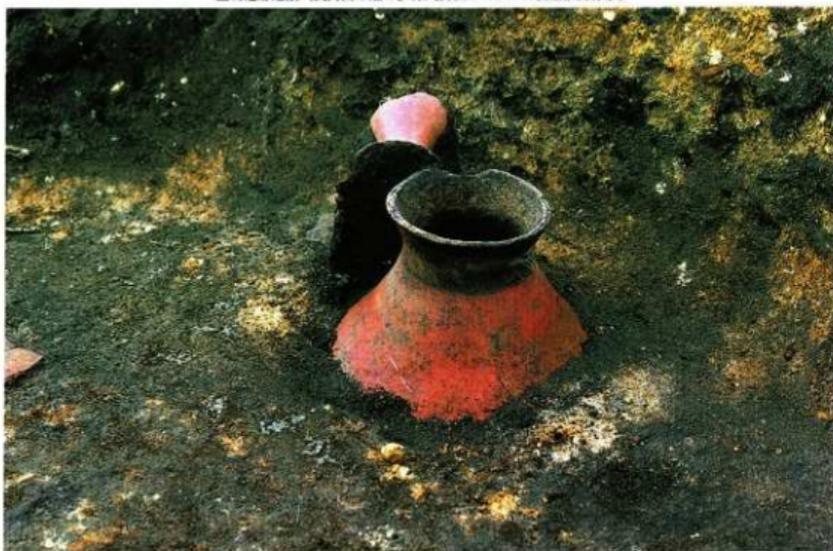
大蔵不動産株式会社  
佐久市教育委員会



聖石遺跡調査区全景 (株式会社ユール測量設計撮影)



聖石遺跡遺景（浅間山を鑑む。株式会社ユアール測量設計撮影）



H2号壑穴住居址遺物出土状況

## 例 言

- 1 本書は、大蔵不動産株式会社が行う宅地造成事業に伴い、平成13年度に行った長土呂遺跡群聖石遺跡の発掘調査報告書である。整理作業、報告書刊行は平成13年度に行った。
- 2 調査委託者 大蔵不動産株式会社
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名及び所在地  
長土呂遺跡群 聖石遺跡 (NH1)  
佐久市大字長土呂字聖石 440-1 440-2
- 5 調査期間および面積  
聖石遺跡 発掘調査 平成13年4月9日～4月21日・28日  
面積 585.0㎡  
整理調査 平成13年4月23日～9月28日
- 6 本書の編集、執筆は出澤が行った。
- 7 本書及び聖石遺跡出土遺物等すべての資料は、佐久市教育委員会の管理下に保管されている。

本調査にあたり、大蔵不動産株式会社及び地元地域の方々にはご理解と数々のご協力を頂き、また報告書作成に当たっても多くの方々のご指導、ご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。

## 凡 例

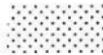
- 1 遺構の略号は以下のとおりである。  
竪穴住居址-H 土坑-D 溝状遺構-M ビット-P
- 2 挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。  
竪穴住居址・溝状遺構-1/80 土坑-1/40 炉-1/10  
土器-1/4 石・鉄製品-1/3  
上記以外のものについては挿図中に明記してある。
- 3 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として記した。
- 4 土層、遺物胎土の色調は、1988年度版『新版 標準土色帖』に基づいて記した。
- 5 写真図版中の遺物の縮尺は概ね挿図と同じである。また、遺物番号と挿図番号は対応する。
- 6 住居址の面積は床面積（住居址下端範囲）を測定し、竪部分は測定値より除外してある。
- 7 挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを示す。



堆山



炉範圍



赤影範圍

# 目 次

巻頭図版

例 言

凡 例

目 次

第 I 章 発掘調査の経緯	
第 1 節 調査の経緯と経過	(1)
第 2 節 調査体制	(2)
第 3 節 調査日誌	(2)
第 II 章 遺跡の立地と環境	(3)
第 III 章 基本層序	(4)
第 IV 章 遺構と遺物	
聖石遺跡全体図	(5)
第 1 節 竪穴住居址	
1) 第 1 号住居址	(6)
2) 第 2 号住居址	(8)
3) 第 3 号住居址	(10)
第 2 節 土坑	
1) 第 1 号土坑	(13)
2) 第 2 号土坑	(13)
3) 第 3 号土坑	(14)
4) 第 4 号土坑	(14)
第 3 節 溝状遺構	
1) 第 1 号溝状遺構	(15)
第 4 節 遺構外出土遺物	(15)
聖石遺跡出土遺物観察表	
第 V 章 まとめ	(17)

写真図版

# 第I章 発掘調査の経緯

## 第1節 調査の経緯と経過

聖石遺跡が存在する長土呂遺跡群はその名のとおり佐久市長土呂地籍に所在する。当地はいわゆる田切り地形の低地に面した帯状台地上の縁に位置し、標高は716m内外を測る。遺跡周辺は近年新幹線佐久平駅を中心に佐久市でも有数の商業地が形成されており、遺跡東側にかつてあった田切りの低地は現在国道141号線バイパスに姿を変えている。

今回、遺跡群内において大蔵不動産株式会社により宅地造成事業が計画され、佐久市教育委員会に遺跡の有無について照会があった。教育委員会では長土呂遺跡群が所在するため試掘調査による確認を行い、結果、開発地籍より弥生時代の竪穴住居址、土器等の遺構・遺物が検出された。

その結果を踏まえ、大蔵不動産株式会社と佐久市教育委員会、両者において協議が行われ遺構の破壊を免れない開発地籍東側について佐久市教育委員会文化財課によって記録保存を目的とする発掘調査が実施されることとなった。



第1図 聖石遺跡位置図 (1:5,000)

## 第2節 調査体制

平成13年度

○発掘調査受託者

佐久市教育委員会

事務局

文化財課

教育長 依田 英夫（4月～6月） 高柳 勉（7月～）

教育次長 小林 宏造（4月～5月） 黒沢 俊彦（5月～）

課長 草間 芳行

文化財係長 荻原 一馬（4月～5月） 森角 吉晴（5月～）

文化財係 林 幸彦、須藤 隆司、小林 真寿、羽毛田 卓也、富沢 一明、上原 学  
山本 秀典、出澤 力

平成13年度

調査主任 佐々木 宗昭、森泉 かよ子

調査副主任 堺 益子

調査員 浅沼 ノブ江、柏木 貞夫、柏木 三郎、木内 節夫、菊池 喜重

神津 ツネヨ、小林 まさ子、篠崎 清一、富沢 真哉、細堂 ミスズ

真嶋 保子、渡辺 長子

## 第3節 調査日誌

平成13年度

平成13年4月5日

発掘調査準備。

4月9日

器材搬入。重機による表土剥ぎを開始する。

4月10日

H2号住居址調査。D1～4号土坑調査。

4月11日

H1号住居址調査。重機による表土剥ぎ本日で終了。

4月12日

M1号溝状遺構調査。雨天により半日で調査終了。

4月16日

H3号住居址調査。

4月20日

対象地の遺構の調査が終了。器材を撤収する。

4月23日

室内整理作業開始。

4月28日

ラジコンヘリによる航空写真撮影を行う。

これにて現場での全作業を終了する。

平成13年5月1日～9月28日

室内整理作業。土器実測、図面作成、原稿執筆を行い報告書を刊行する。

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

聖石遺跡が存在する長土呂遺跡群は佐久市の北部、佐久市長土呂地籍に所在する。佐久平の北方は浅間山南麓の末端にあたり火山噴出物が厚く堆積しているが、その性格上水による各種作用を受けやすく小河川などによって容易に浸食され、結果大小さまざまな峡谷や「田切り」地形と呼ばれる火山山麓特有の帯状台地と帯状の低地からなる交互地形が形作られた。聖石遺跡の東側は現在では道路に姿を変えているがかつては田切りの低地で、聖石遺跡はその田切り地形の作る帯状台地の縁に位置して遺跡は東側の低地に向かって落ち込んでいる。

田切り地形は現在の佐久平駅周辺でその姿を失い、その一帯は田切りから流出した土砂が堆積して低湿地となっている。昭和40年代までは塚原泥流により形成された「流山」と呼ばれる残丘が小島のように点在していたが、一帯は圃場整備により水田となり、駅周辺に至ってはかつての面影を知る由もない。遺跡は田切りから低湿地へと変化する地形の中間、帯状台地の舌端部付近に位置している。

本遺跡の周辺では田切りの台地上、またその低地に多くの遺跡の存在が知られている。上信越自動車道、長野新幹線、流通業務団地造成事業、区画整理事業といった大規模な開発が相次ぎ当地の風景は大きく様変わりしたが、それらに伴う大規模な発掘調査によって、当地周辺に現在の活況にも劣らない佐久有数の大集落が存在したことが明らかになっている。

田切りに挟まれた台地上に展開する遺跡群としては、本遺跡の所在する長土呂遺跡群を始め、近津遺跡群、周防畑遺跡群、芝宮遺跡群、枇杷坂遺跡群などがある。これらを中心にして本遺跡周辺の遺跡分布を以下に示した。

本遺跡と同じ田切りに展開する遺跡として特に顕著なのは平成元年から7年にかけて発掘調査が行われた長土呂遺跡群聖原遺跡Ⅰ・Ⅲ～Ⅵ・Ⅷ・Ⅹである。97,000㎡の面積から古墳～平安時代の住居址975軒、掘立柱建物址860軒等が確認され、この遺跡周辺が古代の一大集落だったことが明らかになっている。

聖石遺跡は長土呂遺跡群の存在する帯状台地の舌端部に位置しているがこのあたりでは以前より弥生時代後期の集落の存在が知られていた。本遺跡周辺での弥生時代の遺跡の発掘調査では昭和55年に行われた周防畑B遺跡があり、弥生時代後期の住居址23軒、土坑2基、円形周溝墓2基が調査されている。また田切りの南の低湿地では弥生時代後期から古墳時代前期の住居址3軒が発掘調査されており、低湿地に弥生時代後期から古墳時代前期に当たる集落址が存在する事が確認されている。

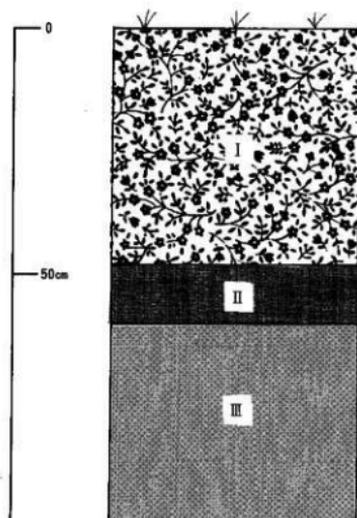


第2図 聖石遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

聖石遺跡周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	立地	地	縄	弥	古	平	中	備	考
1	聖石遺跡	長土呂字聖石	台地		○					本報告書	
2	直路遺跡Ⅰ・Ⅱ	岩村田字直路水引	微高地		○			○		平成10年度発掘調査	
3	清水田遺跡	岩村田字清水田	台地		○	○				昭和53年度発掘調査	
4	辻の前遺跡Ⅱ	長土呂字辻の前	低地		○					平成12年度発掘調査	
5	下聖壇遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂字下聖壇	台地		○	○	○			昭和63・平成4・11年度発掘調査	
6	高山遺跡	長土呂字下高山	台地					○		平成5・7年度発掘調査	
7	入高山遺跡	長土呂字入高山	台地				○	○		平成11年度発掘調査	
8	上高山遺跡	長土呂字上高山	台地				○			平成元・3年度発掘調査	
9	北近津遺跡	長土呂字北近津	台地		○			○		昭和46年度発掘調査	
10	西近津遺跡	長土呂字西近津	台地		○	○				昭和46年度発掘調査	
11	周防畑A遺跡	長土呂字南下北原	台地					○		昭和54年度発掘調査	
12	周防畑B遺跡	長土呂字下仲田	台地		○	○				昭和54年度発掘調査	
13	南上中原・南下中原	長土呂字南上中原	台地					○	○	昭和63・平成5年度発掘調査	
14	惣原遺跡Ⅰ～Ⅹ	長土呂字惣原	台地					○	○	平成元～9年度発掘調査	
15	芝宮遺跡群	長土呂字上芝宮	台地					○	○	平成5～7年度発掘調査	
16	上久保田遺跡Ⅰ～Ⅶ	岩村田字上久保田向	台地					○	○	平成元～4年度発掘調査	
17	濁り遺跡	塚原字濁り・丸山	低地		○	○				平成4年度発掘調査	
18	東池上古墳群	常田字東池下	微高地					○		昭和49年度発掘調査	
19	下大豆塚古墳群	塚原字下大豆塚	微高地					○		昭和56年度発掘調査	

### 第三章 基本層序



Ⅰ. 10yr4/4 (褐色土) 耕作土。

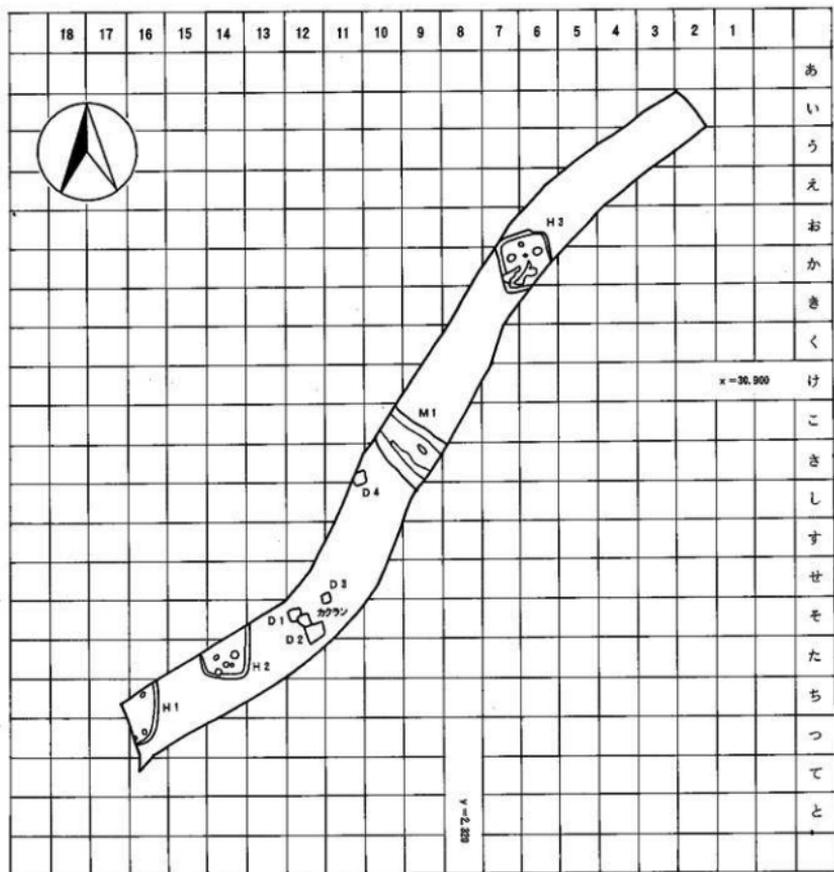
Ⅱ. 10yr3/4 (暗褐色土) しまり、粘性有り。パミス、軽石を微量に含む。

Ⅲ. 10yr6/6 (明黄褐色土) 遺構確認面。ローム層。軽石を多く含む。

本遺跡の基本層序は調査区中央から抽出され、土層は耕作土であるⅠ層を除いて2層に分けることができた。遺構確認面はⅢ層のローム層である。

第3図 基本層序模式図

# 第IV章 遺構と遺物



第4図 聖石遺跡全体図 (1 : 500)

## 第1節 竪穴住居址

### 1) H1号竪穴住居址 (第5、6図、図版二、八)

#### 遺構

本住居址は調査区西南端、ち・つ-16・17グリッドに位置し、全体層序第Ⅱ層から検出された。他遺構との重複関係は認められず、住居址の西側は調査区外のため未調査で部分的に後世の攪乱による破壊を受けている。形態は全体を確認できないため不確定ではあるが隅丸方形を呈すると考えられ規模は東壁長644cmを測り得るのみである。長軸方位はN-13°-Eを示す。確認面からの壁高は東壁中央付近で14cmを測る。

覆土はビット覆土を含め12層に分割されたが、主体となるのは1、2層で3層は壁際でのみ認められ4層は調査を行った遺構範囲の北西部にのみ確認される。4層は非常に炭化物を多く含むことと住居内の位置の関係から炉、カマドといった火所に関する層であると考えられる。床面は高質化しており約5-12cmほどの深さで掘り下げ、そこへ5、6層を埋め戻し貼床としている。

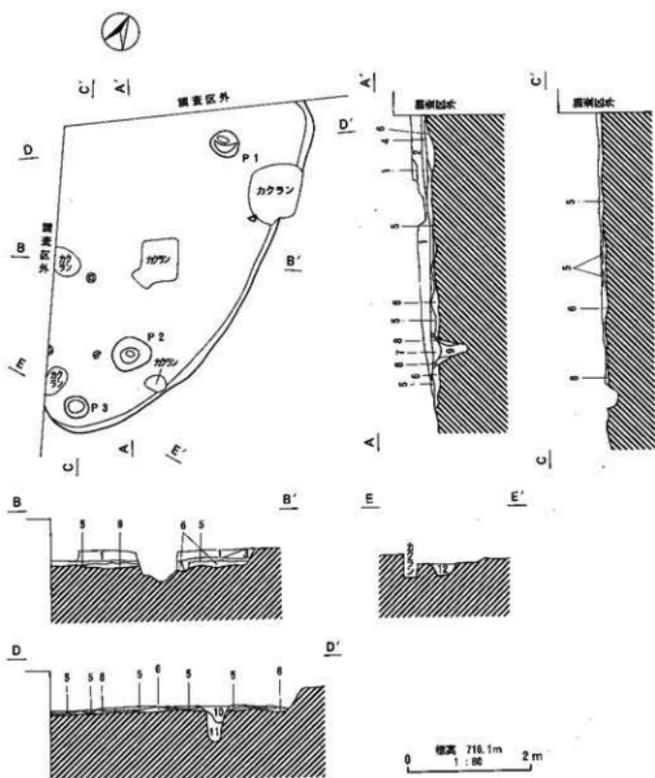
ビットはP1-P3の3個が検出された。規模はP1で径46cm深さ、P2で径59cm深さ、P3で径37cm深さを測る。P1、P2は主柱穴であると思われ、P2には柱痕が残る。

#### 遺物

本住居址から出土した遺物は図示した物の他にも甕、壺などの弥生時代に当たる土器片が出土している。すべての遺構において、文様等が顕著な破片資料については拓本を行い図示している。

1は壺の口縁部である。遺構覆土から出土した。2も壺の口縁部で両面に赤彩が施されている。東壁際の床直上で出土した。3は壺の底部で外面に僅かではあるが赤彩の痕跡を認めた。覆土より破片で出土。4は小型甕で底部から胴部にかけて住居址北西側の覆土から出土した。遺物は外面に赤彩の痕跡を認め、内外面ともに火熱の痕跡を残している。5は高坏で脚部のみ出土。住居址南側の覆土から出土し、両面に赤彩を認める。6は石製品ですり石。P2内から出土した。

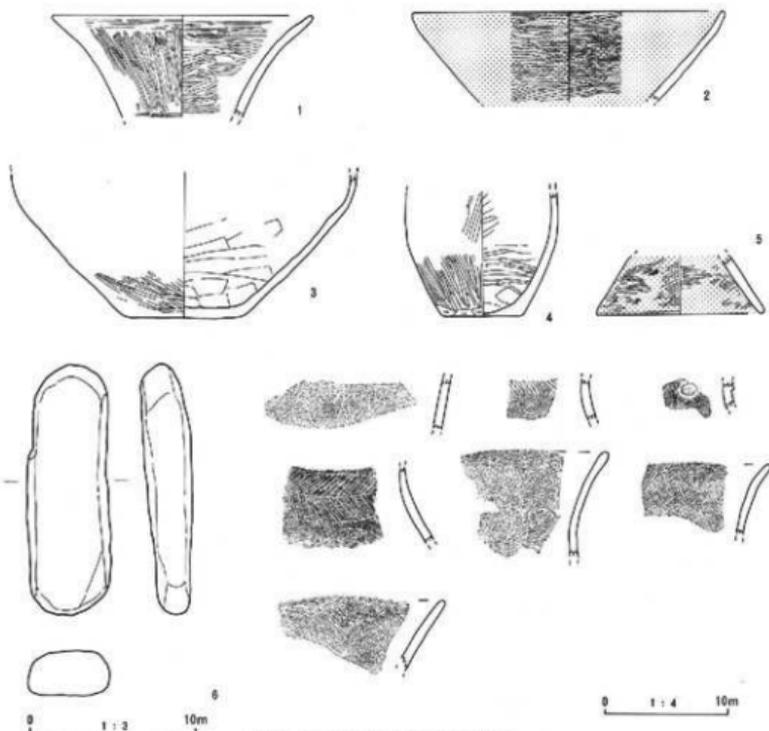
本址は上記の遺物により弥生時代後期後半に位置付けられると考える。



#### H1土説

- |                   |                               |
|-------------------|-------------------------------|
| 1. 10yr2/3 (黒褐色土) | パミス、炭化物を多く含む。                 |
| 2. 10yr3/3 (暗褐色土) | パミス少量含む、炭化物多く含む。              |
| 3. 10yr3/4 (暗褐色土) | しまり、粘性弱い、パミスを含む。              |
| 4. 10yr3/4 (暗褐色土) | しまりやや有。軽石を多く含む、炭化物を多量に含む。     |
| 5. 10yr7/6 (明黄褐色) | 粘床。しまり有、軽石、パミス含む黒色土ブロックを混入する。 |
| 6. 10yr6/6 (明黄褐色) | パミスを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。       |
| 7. 10yr3/3 (暗褐色土) | パミス粒微量に含む。                    |
| 8. 10yr4/4 (褐色土)  | パミス、軽石含む。                     |
| 9. 10yr3/4 (暗褐色土) | しまりやや有。パミス、軽石少量含む。柱痕か。        |
| 10. 10yr4/4 (褐色土) | しまり、粘性あまりなし。軽石含む。             |
| 11. 10yr4/3 (褐色土) | しまりやや有、軽石含む。                  |
| 12. 10yr4/4 (褐色土) | 軽石、パミス含む。                     |

第5図 H1号整穴住居址実測図



第6図 H1号竪穴住居址出土遺物実測図

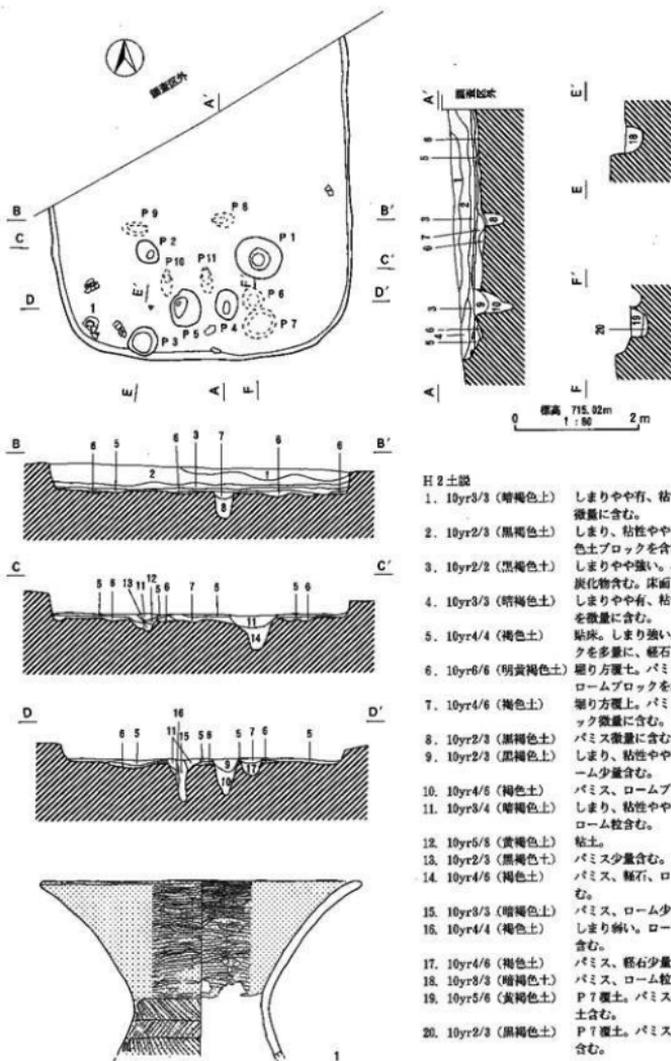
## 2) H2号竪穴住居址 (第7, 8図、図版三、四、八、九)

### 遺構

本住居址は調査区西南部、そ・た-13~15グリッドに位置し、全体層序第三層から検出された。他遺構との重複関係は見られず、住居址北側は調査区外のため未調査である。形態はやや隅丸の長方形を呈する。規模は南壁長403cm、東壁長462cm(検出部)、西壁長218cm(検出部)を測り得るのみである。壁高は東壁で34cmを測る。長軸方向はN-2°-Eを示し、ほぼ真北を指していた。

覆土はピット覆土を含め20層に分割される。主体となるのは1~3層で4層は南壁の際でのみ確認された。床面は遺構中央部を最も深く最高20cm、壁際の最も浅いところで4cmほど掘り下げそこへ5~7層を粗め戻し貼床としている。貼床はしまりが有りはっきりとしていた。

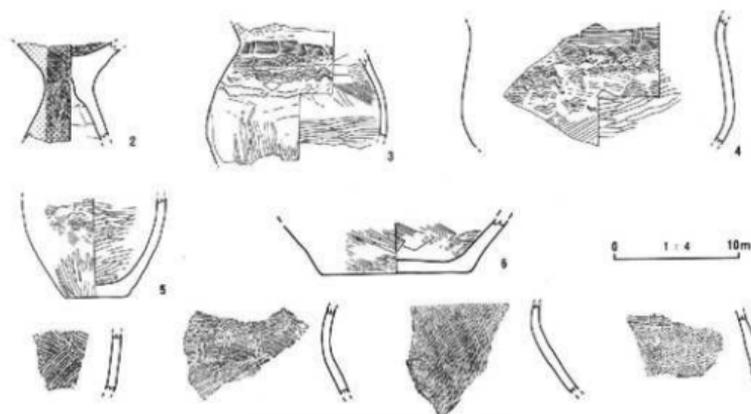
ピットは床面から検出された物がP1~5の5個、履り方から検出されたP6~11を加え合計11個確認されている。規模はP1で径72cm深さ57cm、P2径32cm深さ26cm、P3径45cm深さ27cm、P4径47×36cm深さ59cm、P5径58×49cm深さ66cm、P6径36cm深さ27cm、P7径45cm深さ26cm、P8径33×21cm深さ48cm、P9径40×20cm深さ46cm、P10径43×18cm深さ40cm、P11径39cm×16cm深さ32cmを測る。柱痕も認められることからP1, 2が主柱穴であると考えられる。掘



#### H2土説

1. 10yr3/3 (暗褐色土) しまり中や有、粘性なし。パミス微塵に含む。
2. 10yr2/3 (黒褐色土) しまり、粘性中や有。パミス、黒色土ブロックを含む。
3. 10yr2/2 (黒褐色土) しまり中や強い。パミスは多く、炭化物含む。床面直上の覆土。
4. 10yr3/3 (暗褐色土) しまり中や有、粘性弱い。パミスを微量に含む。
5. 10yr4/4 (褐色土) 粘球。しまり強い。ロームブロックを多量に、礫石を多く含む。
6. 10yr6/6 (明黄褐色土) 張り方覆土。パミス、礫石、黒色ロームブロックを混入する。
7. 10yr4/6 (褐色土) 張り方覆土。パミス、ロームブロック微量に含む。
8. 10yr2/3 (黒褐色土) パミス微量に含む。
9. 10yr2/3 (黒褐色土) しまり、粘性中や有。パミス、ローム少量含む。
10. 10yr4/6 (褐色土) パミス、ロームブロック少量含む。
11. 10yr3/4 (暗褐色土) しまり、粘性中や有。パミス、ローム粒含む。
12. 10yr5/5 (黄褐色土) 粘土。
13. 10yr2/3 (黒褐色土) パミス少量含む。
14. 10yr4/6 (褐色土) パミス、礫石、ロームブロック含む。
15. 10yr3/3 (暗褐色土) パミス、ローム少し含む。柱痕か。
16. 10yr4/4 (褐色土) しまり強い。ロームブロック多く含む。
17. 10yr4/6 (褐色土) パミス、礫石少量含む。
18. 10yr3/3 (暗褐色土) パミス、ローム粒ごく微量含む。
19. 10yr5/6 (黄褐色土) P7覆土。パミス多く含む、黒色土含む。
20. 10yr2/3 (黒褐色土) P7覆土。パミス、炭化物微量に含む。

第7図 H2号竪穴住居実測図



第8図 H2号竪穴住居址出土遺物実測図

り方から検出したP8～11はいずれも細長い楕円形を呈していた。

#### 遺物

本住居址から出土した遺物は図示した物の他に覆土より弥生土器の破片が出土している。

1は壺で口縁部から頸部にかけての出土。両面には赤彩が施され、頸部は矢羽状状が高る。口縁を伏せた状態で住居址南西コーナーの床に口縁を埋設するようにして出土した。出土時に上を向いていた頸部の内面は摩耗により赤彩が剥離しており、出土状況から考えて器台のように何かを上に乗せるような目的で二次利用された物であると考えられる。2は高坏で1と同じく南西コーナー付近より覆土内から出土した。頸部と脚部上段のみの出土で、両面に赤彩が施されている。3は小型の甕。南壁際で出土した大きな破片と、覆土中で検出した破片が接合された物。4は壺の胴部。南西コーナーで出土。5は小型甕の底部で覆土中より出土。両面に赤彩の痕跡を認める。6は壺の底部で覆土中より出土した。

本址は上記の遺物により弥生時代後期後半に位置づけられると考えられる。

### 3) H3号竪穴住居址 (第9～11回、図版五、六、九)

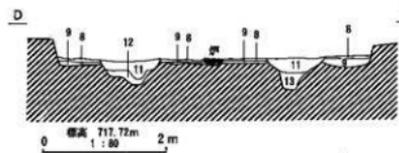
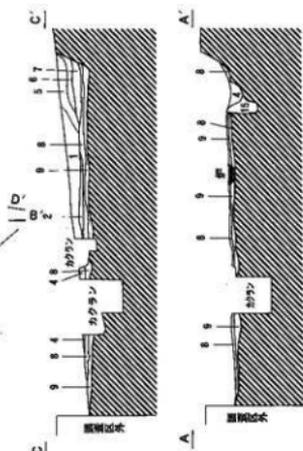
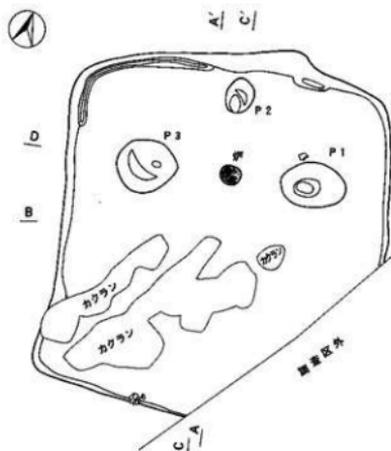
#### 遺構

本住居址はお・か・き・6・7グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層から検出された。他遺構との重複関係は認められず、南東コーナー部分は調査区南側を走る農道に削平されており、遺構内には畑の畝と思われる擾乱を受けている。形態は方形を呈し規模は北壁長493cm、西壁長496cm、東壁長279cm(検出部)、南壁長272cm(検出部)を計測し得るのみである。長軸方位はN-9°-Wを示し、ほぼ真北を指している。確認面からの壁高は北壁中央で42cmを測る。住居址中央より少し北寄り、主柱穴と思われるピットの間に枺を確認している。

覆土はピット覆土を含め15層に分割されたが、主体となるのは1, 2層で3層は西壁際の流れ込みの層。4層は住居址南壁際で、5～7層は北壁際で確認される。床面は深さ約10cmから住居址東側の一番深いところで最高30cmまで掘り下げ8～10層を榎の炭床として利用している。8層の貼床はしまりが非常に強く良く硬質化していた。

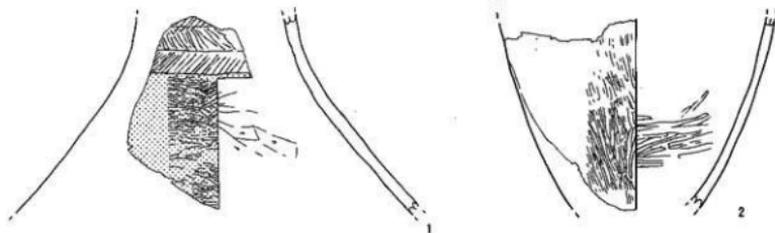
ピットはP1～3の3個が確認された。P1は径105×76cm深さ50cm、P2は径54cm深さ49cm、P3は径96cm深さ38cmを測る。P1とP3は主柱穴である。

住居址は住居址中央、主柱穴の中間に位置しており形態はほぼ円形を示す。第11回図の壺と、またそれとは異なる個体の土器破片が完全に破片の状態に放射状に枺内に敷設されていた。規模は径31cmを測り炭化物を多量に含む覆土の厚さ

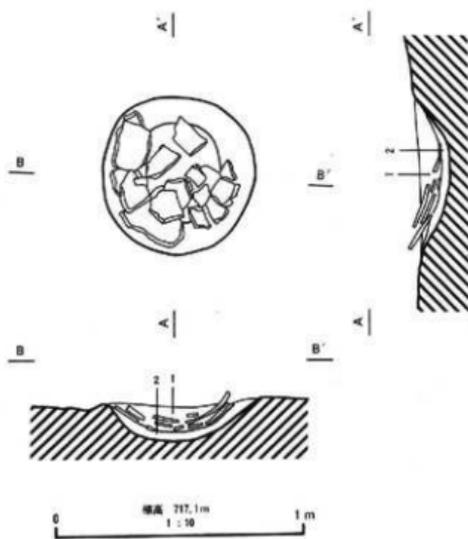


H3 土説

1. 10yr2/2 (黒褐色土) 軽石を少量含む。
2. 10yr3/3 (暗褐色土) 軽石を少し含み、ロームブロックを少量含む。
3. 10yr4/4 (褐色土) 軽石を多く含む。
4. 10yr2/3 (黒褐色土) しまりあまりなし。パミスを微量含む。
5. 10yr2/3 (黒褐色土) 軽石を少量含む。
6. 10yr2/2 (黒褐色土) 軽石を少量含む。
7. 10yr2/2 (黒褐色土) 軽石、パミスを含む。
8. 10yr3/4 (暗褐色土) 粘床。非常に強くしまり、軽石、パミス、ローム粒を含む。
9. 10yr2/3 (黒褐色土) 砂質。軽石を少量含み、ロームブロックを含む。
10. 10yr5/8 (黄褐色土) やや砂質。しまり強く、軽石を含む。
11. 10yr2/3 (黒褐色土) 軽石を少量含む。
12. 10yr3/3 (暗褐色土) 軽石、ロームブロック少量含む。
13. 10yr4/4 (褐色土) 軽石、ロームブロック多く含む。
14. 10yr2/3 (黒褐色土) しまりあまりなし。パミス微量を含む。
15. 10yr3/4 (暗褐色土) ローム粒、パミスを含む。

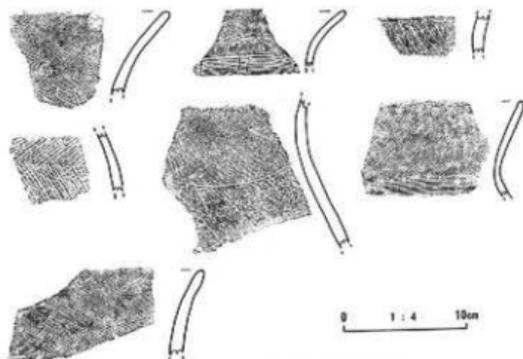


第9図 H3号竪穴住居実測図



1. 10yrs/3 (暗褐色土) 赤の覆土。炭土、灰化物を含む。
2. 10yrs/4 (暗褐色土) ローム、パミスを含む。

第10図 H3号竪穴住居北和実断面



第11図 H3号竪穴住居址出土遺物拓影図

は7cmを測る。敷設された土器片にはそれぞれ火熱を受けた痕跡を認めるが、炉内、また炉周辺に焼上等は顕著ではなかった。

北西コーナーに部分的であるが壁溝を認めた。

#### 遺物

本遺構からの出土遺物は図示した物の他には覆土より出土した弥生土器の破片などがある。

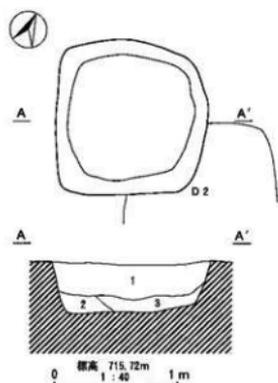
1は竈で頸部から胴部にかけて破片での出土。住居址南西の覆土内より出土した。外面に赤彩を認め、頸部には矢羽状文が巡る。2は竈で胴部下半のみ出土。炉内に破片の状態で敷設されていた土器片を接合したものである。出土地点の性格上破片は火熱を受けた物が多い。炉内からは前述の通り2とは異なった個体の破片も確認されていること、接合の結果炉内の破片のみでは完形品とならないことからあらかじめ破損したか何らかの理由により破片となった物を炉内に敷設したと考えられる。

本址は上記の出土遺物により弥生時代後期後半に位置づけられると考える。

## 第2節 土 坑

### 1) D 1号土坑 (第14図、図版七)

D 1号土坑は調査区中央部西寄りのそー12グリッドに位置し、全体層序第Ⅲ層より検出された。D 2号土坑と重複しており、新旧関係ではD 1号土坑の方が新しい。形態は方形を呈し、規模は長軸長117cm、短軸長101cmを測る。長軸方向はN-24°-Wを示す。確認面からの深さは41cmを測った。断面形は逆台形であり底部は平坦である。覆土は3層に分けられた。遺物は確認されず用途、本遺構の時期の所産は不明である。



#### D 1 土説

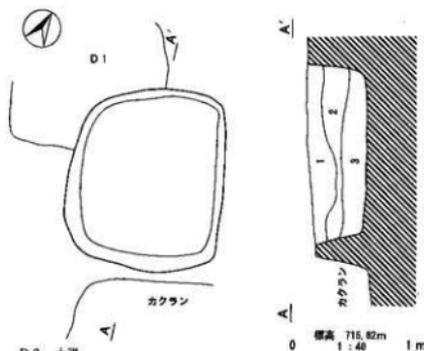
1. 10yr2/3 (黒褐色土) パミス、黒色土ブロック多く含む。
2. 10yr5/6 (黄褐色土) ロームシルト質土。しまりややあり粘性なし。
3. 10yr3/3 (暗褐色土) パミス、ロームブロック多く含む。

第12図 D 1号土坑実測図

### 2) D 2号土坑 (第15図、図版七)

D 2号土坑は調査区中央部西寄りのそー12グリッドに位置する。D 1号土坑と重複し、その新旧関係はこちらの方が古くD 1に切られる格好になっている。形態は方形を呈し、規模は長軸長135cm、短軸長112cmを測る。長軸方向はN-24°-Wを示す。確認面からの深さは49cmを測った。断面形は逆台形であり底部は平坦である。

覆土は3層に分割された。遺構内からは出土遺物はなく、正確な用途、時期の所産等は不明である。

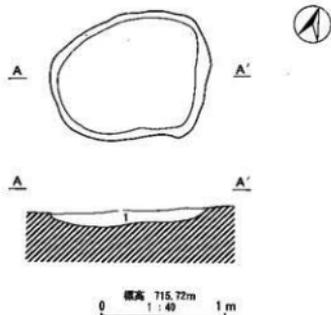


#### D 2 土説

1. 10yr4/6 (褐色土) パミスを多く含む。ローム、黒色土ブロックを混入する。
2. 10yr5/6 (黄褐色土) パミスを多く含む。ローム、黒色土ブロックを混入する。
3. 10yr4/6 (褐色土) パミス、ロームブロックを多量に含む。黒色土ブロックを含む。

第13図 D 2号土坑実測図

### 3) D3号土坑 (第16図、図版七)



#### D3 土説

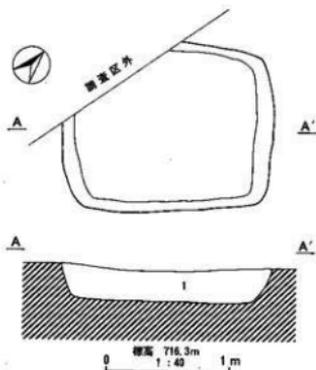
1. 10yr3/4 (暗褐色土) バミス、ロームブロックを多く含む。

第14図 D3号土坑実測図

D3号土坑は調査区中央部西寄り、そ-12グリッドに位置し、全体層序第III層より検出された。他遺構との重複関係は認められない。形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸長112cm、短軸長90cmを測る。長軸方位はN-62°-Eを示す。確認面からの深さは12cmを測った。断面形は逆台形で底部は平坦である。

覆土は単層。遺構内から遺物は確認されずその用途、時期の所産等は不明である。

### 4) D4号土坑 (第17図、図版七)



#### D4 土説

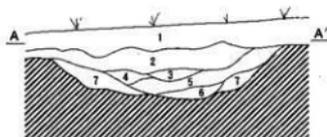
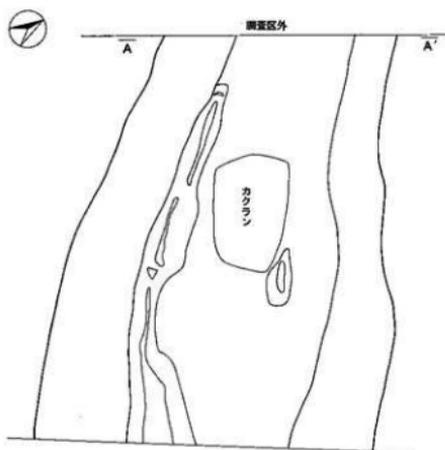
1. 10yr3/4 (暗褐色土) しまりあまりなし。粘性なし。ロームブロックを少量含む。

第15図 D4号土坑実測図

D4号土坑は調査区中央部、さ-11グリッドに位置し、全体層序第3層より検出された。他遺構との重複関係は認められないが遺構の一部が調査区外のため未調査である。形態は方形を呈し、規模は長軸長148cm、短軸長117cmを測る。長軸方位はN-62°-Eを示す。確認面からの深さは27cmを測った。断面形は逆台形で底部は平坦である。

覆土は単層。遺物は確認されず用途、その時期の所産は不明である。

### 第3節 溝状遺構



標高 716.1m  
0 1:80 2m

#### M1 土説

- |                    |                                   |
|--------------------|-----------------------------------|
| 1. 10yr/4 (褐色土)    | 耕作土。                              |
| 2. 10yr/4 (暗褐色土)   | 粘性あまりなし。小礫含み、パミス、軽石少量含む。炭化物微量に含む。 |
| 3. 10yr/3 (暗褐色土)   | 粘性あまりなし。パミス、軽石微量に含む。              |
| 4. 10yr/4 (褐色土)    | しまりあまりなく粘性なし。パミス微量に含む。            |
| 5. 10yr/3/2 (黒褐色土) | しまりあり粘性なし。パミス、軽石少量含む。             |
| 6. 10yr/3/4 (暗褐色土) | しまり有り粘性なし。パミス微量含む。                |
| 7. 10yr/4 (褐色土)    | パミス、軽石含み、地山ロームブロック少量含む。           |

第16図 M1号溝状遺構実測図

#### 1) M1号溝状遺構 (第18図、図版七)

本遺構は調査区中央、こ・さ・し-9・10グリッドに位置し、基本層序第Ⅱ層下方より検出された。重複関係にある遺構は存在しないが、溝の中央は攪乱によって破壊されている。調査区を横断するように検出され、両端は調査区外のため未調査であるが、本調査に先立つ試掘の際に一部ではあるが北西に伸びるプランを確認している。断面形はすり鉢上を呈し、遺構西側の底部に細長い落ち込みを認める。規模は最大幅で554cm、深さは最大94cmを測る。長軸方位はN-41°-Wを示す。

覆土は6層に分割できた。覆土の体積状況からこの溝状遺構は田切りの低地に向かって落ち込んでいる沢のような物と考えられ、自然に覆土が堆積しその姿を失った物と思われる。また、検出時に2層において流れ込みと思われる。弥生時代の所産の土器片を数点認めたが、図示できる物はない。

### 第4節 遺構外出土遺物 (第19図、図版九)

聖石遺跡において遺構外から出土した遺物では検出時に弥生土器の破片等を認めた。図示できる物はなかったが、H



第17図 遺構外出土遺物実測図

3号堅穴住居址と切り合っていた攘乱の内部より出土した銅製の簪を図示する。攘乱よりの出土のため何時の物かは判然としないが、飾り部分が耳掻きになっているユニークな簪である。耳掻きの機能を持つ簪は佐久市大字岩村田の柳家遺跡でも確認されているがそちらの物は表面に銀が貼られ聖石遺跡から出土した簪と比べると非常に装飾性が高い。

## 聖石遺跡出土遺物観察表

### H 1号堅穴住居址

探検番号	器種	法量 (cm)			胎土色調	調整(外面) (内面)	備考
		口径	底径	器高			
1	壺	21.2	-	-	100.5mm以下の白色粒子多量を含む 7.5YR5/6 褐色	口縁部にハケメ、口縁～頸部にかけて縦方向のミガキ、頸部に横線状文(左回り、2連止め) ハケメ後横方向ミガキ	
2	壺	25.4	-	-	100.5mm以下の白色粒子、径2mm以下 赤色粒子少量含む 10YR5/2 灰黄褐色	横方向ミガキ 横方向ミガキ	外面赤色塗彩
3	壺	-	9.2	-	2mm以下の白色粒子多量含む、2mm以下 黒色粒子少量含む 10YR5/6 灰褐色	横方向ミガキ 横方向ヘラケズリ	外面に赤彩の痕跡を認める
4	小型壺	-	6.2	-	1mm以下白色粒子多量含む、2mm以下 黒色粒子少量含む 5YR5/6 明赤褐色	縦方向ミガキ、底部付近ヘラケズリ ヘラケズリ後横方向内ミガキ	外面に赤彩の痕跡を認める 内外面に火熱の痕跡を認める
5	高坏	-	13.6	-	1mm以下の白色粒子多量含む、3mm以下 の黒色粒子含む 10YR5/2 灰黄褐色	横方向ミガキ 横方向ミガキ	外面赤色塗彩 頸部破片

### H 2号堅穴住居址

探検番号	器種	法量 (cm)			胎土色調	調整(外面) (内面)	備考
		口径	底径	器高			
1	壺	26.2	-	-	0.5mm以下白色粒子少量含む、1mm以下の 黒色粒子を多量含む 10YR2/3 浅黄褐色	口縁部から頸部にかけて赤彩が施され横方向 ミガキ、縦線状文 口縁部縦方向ミガキ、赤彩が施される。頸部 は表面が摩耗しており調整は不明	床直上に遺位で出土し、 内面頸部付近は摩耗して いる。二次利用の痕跡を 認める
2	高坏	-	-	(7.8)	1mm以下の白色粒子多量、2mm以下の 赤黒色粒子少量含む 10YR7/4 に近い黄褐色	坏部縦方向ミガキ、脚部縦方向ミガキ 坏部横方向ミガキ、脚部ヘラケズリ	外面と坏部内面に赤彩を 認める
3	小型壺	-	-	(10.8)	1mm以下黒色粒子含む 10YR5/3 浅黄褐色	口縁部縦方向のハケメ残る、頸部7単位帯 横線状文(右回り、2連止め)、胴部上方に波状 文(右回り、7単位)胴部下方に縦方向ミガ キ 胴部ハケメ、胴部下方に横方向ミガキ	外面に火熱の痕跡
4	壺	-	-	(10.0)	0.5mm以下白色粒子含む2mm以下 黒色粒子少量含む 7.5YR5/6 褐色	頸部に単位不明の横線状文(右回り、3連 止め)胴部はハケメの後上方にのみ波状文 (右回り、5単位) 横方向のミガキ	
5	小型壺	-	4.8	-	0.5mm以下白色粒子含む 10YR4/1 褐灰色	ハケメの後波状文(左回り、5単位) 胴部下方縦方向のヘラケズリ 横方向ミガキ	内外面に赤彩の痕跡を 認める
6	壺	-	12.0	-	2mm以下の白色粒子多量を含む 10YR6/4 に近い黄褐色	横方向ミガキ ハケメ	

### H 3号堅穴住居址

探検番号	器種	法量 (cm)			胎土色調	調整(外面) (内面)	備考
		口径	底径	器高			
1	壺	-	-	(14.7)	1mm以下の薄、黒色粒子少量含む 10YR8/4 浅黄褐色	胴部横線状文、胴部縦方向のハケメ 胴部横方向ミガキ、胴部ヘラケズリ	外面部内面胴部付近に 赤彩の痕跡を認める
2	壺	-	-	(15.3)	1mm以下の白色粒子少量含む 10YR8/3 浅黄褐色	縦方向のヘラケズリ 横方向のヘラケズリ	炉内から破片を出土する ような形で土火熱 の痕跡あり

## 第V章 まとめ

聖石遺跡において確認された3軒の住居址は、いずれも弥生時代後期後半に位置付けられる遺構だった。調査対象地周辺は前述の通り古より弥生時代後期の集落跡の存在が周知されていた地域であり、田切り地形が形成する帯状台地が低湿地へとその姿を失う縁辺部から低湿地、その中の微高地といったところにかつての生活の痕跡が認められている。田切り地形の特徴が顕著に現れている聖石遺跡以北の地域には古墳後期から平安にわたる佐久市屈指の大集落で有るところの聖原遺跡、芝宮遺跡群が存在し同じ帯状台地上でもその縁辺とは時期を異にしている。

濁川流域や田切りの低地上は当地で営まれた大集落の生活を支えていた水田址の存在が推測されるが、かつての圃場整備によって破壊されてしまっている。しかし、圃場整備が行われず破壊を免れた地域では濁り遺跡、中長塚遺跡、松の木遺跡などから古代の水田跡と関連する遺構が発見されている。低地を望む台地の舌端部や低地に集落が展開しているのは、食料生産の場である低地に近いという利便性によるところが多いのではないかと推測される。

本調査が行われる前段階に行われた試掘調査では、調査対象区よりやや高い北側の畑だった地点も遺構の確認を行い、密集した状態で21軒もの弥生時代の住居址を検出した。その地点は保護協議の結果保護措置が執られることとなり調査は行われなかったのだが、聖石遺跡より北側の台地上に弥生の大規模な集落の存在する可能性を示唆している。

遺跡周辺は周知の通り商業地として開発が進み、それに伴う発掘調査も多く行われ当地における集落の様相が次々と明らかになってきている。今後の調査により当地における弥生時代集落のあり方がさらに解明されることを願うところである。

### 参考文献

- 小山岳夫 1999 「佐久地方の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』 長野県考古学会弥生部会
- 佐久市教育委員会 1981 『周防畑B』
- 佐久市教育委員会 1987 『北西の久保』
- 佐久市教育委員会 2001 『辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ』

# 写 真 图 版



聖石道新風景（南から、株式会社ユー・アール測量設計 撮影）



聖石道新風景（北から、株式会社ユー・アール測量設計 撮影）



H1号壑穴住居址完備（南から）



H1号壑穴住居址掘り方（南から）



H2号壑穴住居址完掘（南から）



H2号壑穴住居址遺物出土状況（北より）



戸2号壑穴住居址掘り方（南から）



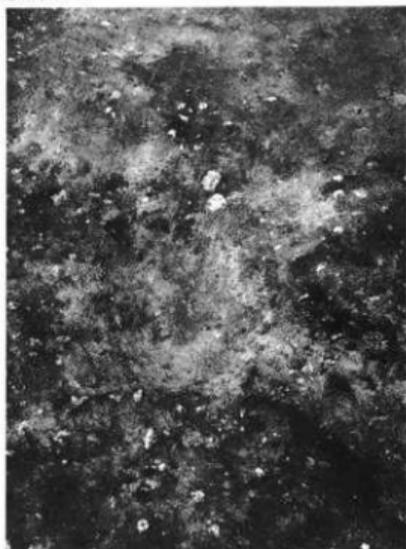
調査区南西部分近景（東より）



H3号壙穴住居址完掘 (西から)



H3号壙穴住居址の完掘 (南より)



H3号壙穴住居址の掘り方 (南より)



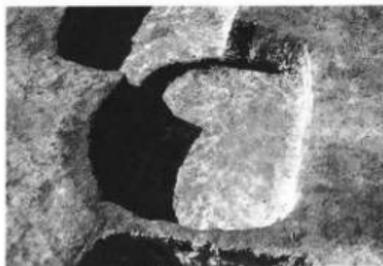
日3号墓穴住居址掘り方(西より)



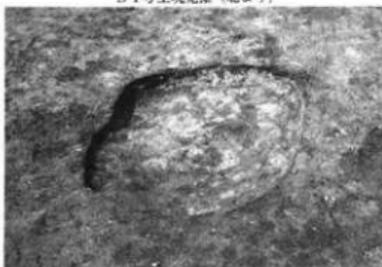
調査風景(北より)



D1号土坑完掘（北より）



D2号土坑完掘（南より）



D3号土坑完掘（南より）



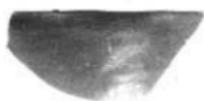
D4号土坑完掘（北より）



M1号溝状遺跡完掘（株式会社スーパール測量設計撮影）



H1-1



H1-2



H1-3



H1-4



H1-5



H1-8



H1 破片資料



H2-1



H2-2



H2-3



H2-4



H2-5



H2-6



H2 碗内資料



H3-1



H3-2



H3 碗片資料



遺跡外出土遺物

## 佐久市埋蔵文化財調査報告書

- |   |  |
|---|--|
| <p>第1集 『金井城址』</p> <p>第2集 『市内遺跡発掘調査報告書1990』</p> <p>第3集 『石附冢BⅢ』</p> <p>第4集 『大ふけ遺跡』</p> <p>第5集 『立科F遺跡』</p> <p>第6集 『上曾根遺跡』</p> <p>第7集 『三貫畑遺跡』</p> <p>第8集 『蔵の下の遺跡』</p> <p>第9集 『国道141号線関係遺跡』</p> <p>第10集 『監原遺跡Ⅱ』</p> <p>第11集 『赤座垣外遺跡』</p> <p>第12集 『若宮遺跡Ⅱ』</p> <p>第13集 『上高山遺跡Ⅱ』</p> <p>第14集 『栗毛坂遺跡』</p> <p>第15集 『野馬久保遺跡』</p> <p>第16集 『石井城跡』</p> <p>第17集 『市内遺跡発掘調査報告書1991』<br/>(1月～3月)</p> <p>第18集 『西曾根遺跡』</p> <p>第19集 『上芝宮遺跡』</p> <p>第20集 『下型埴遺跡Ⅲ』</p> <p>第21集 『金井城跡Ⅱ』</p> <p>第22集 『市内遺跡発掘調査報告1991』</p> <p>第23集 『南上中原・南下中原遺跡』</p> <p>第24集 『上型埴遺跡』</p> <p>第25集 『上久保田向遺跡Ⅳ』</p> <p>第26集 『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』</p> <p>第27集 『上久保田向遺跡Ⅲ』</p> <p>第28集 『曾根新城Ⅴ』</p> <p>第29集 『筒村遺跡B 山法師遺跡B』</p> <p>第30集 『市内遺跡発掘調査報告1992』</p> <p>第31集 『山法師遺跡A 筒村遺跡A』</p> <p>第32集 『東ノ新』</p> <p>第33集 『原原遺跡Ⅵ 下曾根遺跡Ⅰ<br/>前線部遺跡2』</p> <p>第34集 『西一木柳遺跡Ⅰ』</p> <p>第35集 『市内遺跡発掘調査報告1993』</p> <p>第36集 『蛇塚B遺跡Ⅲ』</p> <p>第37集 『西一木柳遺跡Ⅱ 中西の久保遺跡Ⅰ』</p> <p>第38集 『南下中原遺跡Ⅱ』</p> <p>第39集 『中屋敷遺跡』</p> <p>第40集 『寺畑遺跡』</p> <p>第41集 『曾根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ<br/>上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ<br/>西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ』</p> <p>第42集 『寄山』</p> <p>第43集 『権現平遺跡・池端遺跡』</p> <p>第44集 『寺添遺跡』</p> <p>第45集 『市内遺跡発掘調査報告1994』</p> | <p>第46集 『湧り遺跡』</p> <p>第47集 『上芝宮遺跡Ⅴ』</p> <p>第48集 『池端城跡』</p> <p>第49集 『根々井芝宮遺跡』</p> <p>第50集 『藤塚遺跡Ⅲ』</p> <p>第51集 『寺中遺跡 中屋敷遺跡Ⅱ』</p> <p>第52集 『坪の内遺跡』</p> <p>第53集 『門正坊遺跡Ⅱ』</p> <p>第54集 『市内遺跡発掘調査報告1955』</p> <p>第55集 『香屋前遺跡Ⅰ・Ⅱ』</p> <p>第56集 『塙原遺跡Ⅹ』</p> <p>第57集 『高師町遺跡Ⅱ』</p> <p>第58集 『下虫穴遺跡Ⅰ』</p> <p>第59集 『市内遺跡発掘調査報告書1996』</p> <p>第60集 『曾根城遺跡Ⅱ』</p> <p>第61集 『竈地遺跡』</p> <p>第62集 『野馬久保遺跡Ⅱ』</p> <p>第63集 『西大久保遺跡Ⅲ』</p> <p>第64集 『栗の木遺跡Ⅳ』</p> <p>第65集 『中宿遺跡』</p> <p>第66集 『中西ノ久保遺跡Ⅱ 仲田遺跡 寺畑遺跡Ⅱ』</p> <p>第67集 『供養塚遺跡』</p> <p>第68集 『前藤部遺跡』</p> <p>第69集 『高山遺跡Ⅰ・Ⅱ』</p> <p>第70集 『観音堂遺跡』</p> <p>第71集 『市内遺跡発掘調査報告書1997』</p> <p>第72集 『市道遺跡Ⅱ』</p> <p>第73集 『西一木柳Ⅲ・Ⅳ』</p> <p>第74集 『五里田遺跡』</p> <p>第75集 『八風山・五斗代』</p> <p>第76集 『南近津遺跡』</p> <p>第77集 『香屋前遺跡Ⅲ』</p> <p>第78集 『蛇塚遺跡 蛇塚古墳』</p> <p>第79集 『四ツ塚遺跡Ⅰ』</p> <p>第80集 『四ツ塚遺跡Ⅱ』</p> <p>第81集 『薬師寺遺跡』</p> <p>第82集 『市内遺跡発掘調査報告書1998』</p> <p>第83集 『下型埴遺跡Ⅳ』</p> <p>第84集 『鎌名平遺跡』</p> <p>第85集 『柳堂遺跡』</p> <p>第86集 『市内遺跡発掘調査報告書1999』</p> <p>第87集 『宮添遺跡』</p> <p>第88集 『下曾根遺跡』</p> <p>第89集 『川原塚遺跡』</p> <p>第90集 『栗の木遺跡』</p> <p>第91集 『西一木柳・中長塚・松の木遺跡』</p> <p>第92集 『辻の前遺跡Ⅱ・中仲田遺跡Ⅱ』</p> <p>第93集 『入高山遺跡』</p> |
|---|--|

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第94集

### 聖石遺跡

2002年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953

TEL 0267-68-7321

印刷所 株式会社 中 信 社